

「一医療関係者を担う存在」

青木洋介（あすか製薬株式会社 千葉埼玉支店）

2011 年 2 月、MR 認定試験合格発表があり、血の滲むような勉強の日々が実り無事合格した。その約 1 ヶ月後、まだ記憶にも新しい東北地方太平洋沖地震が発生した。私は埼玉県内の一部の地域を担当していたため、被災地から距離もあり直接地震が及ぼす影響は少ないのではないかと思われた。地震の翌日、「営業所内が揺れでぐちゃぐちゃだ」という上司からの一報を受け、会社内の清掃のため出社するまではそう思っていた。

「工場が被災した。製品が出荷できない。」

出社してすぐに聞いた上司の言葉に耳を疑った。弊社唯一の工場は福島県のいわき市に位置しているが、高台に建っているため津波の影響は少ないと思われた。しかし、地震による強い揺れにより格納倉庫が出入りできなくなったとのことだった。当時の工場倉庫の写真を見て絶句したのを覚えている。

翌週より、担当施設に対しての製品供給停止案内が始まった。正式に MR 認定を受けてから初の大きな壁に直面した。施設に伺い謝罪がメインとなったのだ。

それと同時に代替が可能な製剤は他剤への切り替え等により対処していただいた。しかし、代替製剤がなく休薬することも困難な薬剤があった。その中でも非常事態に陥ったのが甲状腺機能低下症の治療剤である。

甲状腺機能低下症とは甲状腺ホルモンの分泌が低下し、神経系、心臓、代謝など各器官の働きが低下する疾病である。主な症状は無力感、皮膚の乾燥、発汗減少、便秘、体重増加などであり、女性に多く発症する。まだ製品名や効能等一般的な知識しか身につけていなかった私には、患者さんにとってこの製剤がどれだけ重要なものであるのか理解していなかった。

しかし、この製剤は普段から常服する患者が多く、欠かすことの許されない製剤であった。供給難による在庫薄へは甲状腺学会による長期処方制限提案、海外の同一有効成分含有剤の輸入等により対応した。それでも対応しきれず患者、医療従事者の方には多大なご迷惑をお掛けした。謝罪や情報提供に伺っても納得されず、お叱りの言葉をいただくことも多かった。

このような状況で、新人 MR であった私は謝罪に伺うだけでも精神が押し潰されそうなくらいに追い込まれていた。多い日には着信が 50 件以上あり、胃腸炎にも罹った。そんなある日、担当施設の医師から掛けられた言葉がある。

「有難う。貴方も身体に気をつけなさい。貴方が寝込んだら誰が私に情報を提供してくれるんだい。」

医師からの予想外の言葉に涙が出た。同時に当時の私は謝罪をすることしか頭になく、MR として医療の一端を担うという自覚が欠けていたことに気づかされた。医師からの言葉により、情報を提供する責任と重要性を実感することができた。この言葉は今でも私の MR 活動に対する活力となっている。

製品の安定供給再開後は、甲状腺領域に特化した情報提供や施設内での説明会を実施した。甲状腺に特化した説明会は稀なようであり、質問も多くいただいた。

ある施設での精神科を対象とした説明会では、傍聴者の中に自身が甲状腺機能低下症に罹る看護師がいた。

弊社製剤を常用されているとのことだが専門医からの処方ではなく、自身の疾病に関して知識が乏しく症状について悩んでいるとのことだった。しかし、説明会後には「MR さんのおかげで自分の病気を知り、症状と向き合う決心がついたよ」という言葉までいただいた。震災により習得に努めた製品、疾病に関する知識が実際に患者の治療に役立っていることを実感した一瞬であった。

新人 MR として震災直後に経験した「製品供給停止に関わる情報提供」、「安定供給後の甲状腺に特化した情報活動」どちらも医師、薬剤師、看護師、患者にとって重要な情報であり、提供を担う唯一の存在が MR である。

100 年間医療の一端を担ってきた MR という職業だが、私の中ではまだ年月も経験も浅く、まだまだ一人前の MR と呼ばれるには乏しい。

しかし、震災を通じて得た経験により一医療関係者としての責任を自覚し、必要とされる MR として活躍していきたい。